



魔女? 勇者!?  
サイボーグ!!?

日常を破壊せよ!  
新感覚コメディ登場!!

# GOLDEN GO

著=上城建太 illustration=肋兵器

スペシャル  
読みきり!!

**上城建太**——Kamishiro Kenta

第5回講談社BOX新人賞流水大賞「あしたの賞」を受賞。パンドラVOL2（2008年発行）掲載の『感性ドリフト』でデビュー。最近、母親がコロッケ屋【かどっこ】を開店。そのせいで食卓は揚げ物だらけ。

**肋兵器**——Abarahelki

千葉県在住のイラストレーター。現在富士見書房ドラゴンエイジにて、入江君人『神さまのいない日曜日』をコミカライズ連載中。

「ほしとマタンゴ」

「待たれよ」

僕の背中に声がかけられたような気がした。一瞬ビクツと身体が震える。けど、それは微妙に冷たい春風のせいだ。ああ寒い。春先。新学期が始まって、ちよつとは歩き慣れた排ガスまみれの通学路を僕は歩いている。桜の花びらなんて綺麗なもんはないけれど、春ってニオイは微妙にしている。「その男」と再び女性の声が入るけれど、僕はそんな声をシカトしつつ歩く。僕の視界に人はいない。誰もいない。後方には多分一人いる。時計を見ると、予鈴まであと二分だ。「私の話を聞いてくれ」誰に言ってるんだろうって考えるんだけど、周りに誰もいないので、やっぱり僕なんだろうなあ、って他人事みたいに思う。だけでも僕は、知らない人に声をかけられたらシカトする。

「こちらを向いてはくれまいか」

僕はげんなりする。朝っぱらから変なのに絡まれて本当にウンザリだ。まあ、こんな状況になれば、誰だって自分に無関係と思っていたがるわけで。かかっている声でも、僕にかかってないと思いたいわけで。つーか今、遅刻寸前なわけよ。歩いてギリギリなわけよ。腕時計を見るときも遅刻三分前で、そろそろ走らないとダメな僕は走り出す。リピートされる声から逃れたい気持ちもある。

「ま、待たれよ！ その男よ！」

路地裏を抜け、僕はノンストップで目の前の赤信号を渡る。

「待っ——えゲフブブンッ！」車の急ブレーキと何かがはねとばされるような音と骨の折れるような音とが耳にこびりつく。え、僕のせい？ 僕を追いかけて来たから？ とか思うん

だけど僕はそのまま振り返ることなく想像力をゼロにして学校に向かう。

予鈴が鳴り終わつたと同時に僕は下駄箱のある場所に滑り込み、上履きを取り出した。と同時に僕の横に誰かがやってくる。

「高宮殿、お待ちしておりましたぞ」

学ランを着た、黒縁の瓶底メガネを装着してる、いかにも委員長长着てキャラが僕を待ち伏せしていた。髪はボサボサ。無精ヒゲ。ベンゾウさんみたいなイメージを抱かせる男。こいつ誰だよ。……メガネ委員長でいいかと、僕は勝手にそう呼ぶことにする。

「待ち伏せとは失敬な。約束をしていたではありませんか」「……僕と?」「もちろん。昨日、この場で言ったではありませんか。一緒に世界を守ろうと。さあ、行きますぞ!」と僕の腕がぐいぐい引つ張られる。

そんな約束してない僕は、そいつの腹にヒジ打ちをかましてから靴を履き替える。

「ナイス攻撃。戦友が強くて拙者も嬉しいですぞ」効いちやいねえ。

「もうすぐ魔王が復活するのです。倒せるのは高宮殿だけ。ああ、そう言っている間にも魔族がこの学校に近づいている! 迎え撃つしかありませんな!」

「ソウダネ、世界ヲ守ロウネ」

僕はカタコト口調で調子を合わせてやる。棒読み。あしらつたとも言ふ。

「おお、高宮殿! その喋り方……思い出す、思い出しますぞ! ファーランド城で一緒に闘ったミラルスのことを!」

何やら意味不明のことを言いながら涙を流しているメガネ委員長を、僕は蹴り飛ばして教室に到着した。僕の席はど真ん中。あかさはまやらわ。高宮で出席番号が真ん中なせいだ。

僕は入学してからというものの、何度も自分の名前が高宮であることを恨んでいた。どうして僕は高宮なのだ。宮高が良かった。

それというのも「ヤア高宮。オハヨウ」今みたいにガツチガちな機械の声で喋る女が僕の右隣の席にいるからだ。ロングの銀髪。目にはどっかのヒーローがつけてるみたいなバイザー。右耳にはアンテナみたいなのがついてて、天を向いている。サイバーだ。とてもサイバーだ。アトミックだ。こいつがミラルスですか、と一瞬思う。

「今日モ朝カラ頑張ロウナ」

僕は返事をしない。気持ち悪いから。気持ち悪いものはシカトする主義です。つーか、台詞が読みにくいんだよお前。

「ドウシタンダ高宮。今日ハ血糖値ガ少シ低イゾ。朝食ヲ食ベテナイノカ？ ソレハイカン。朝食トイウモノハダナ——」

そんな時、目の前にハエが飛んできた。僕の鼻先を飛び回るそのハエはブーンブーンとウザイ——そう思った瞬間、キランと僕の目の前で何かが光る。少し鼻先が熱かった。すると、床からモワモワと煙があがってきた。足下を見ると、なぜかハエが燃えている。

「高宮、怪我ハ無イカ？」

そう言いながらガチンとハエを踏み潰したロボ女をスルーしてイスに座る。ん、どうしてハエが潰れるのにそんな音がするんだ。気持ち悪い。気持ちを切り替えるため、僕は筆箱からシャーペンを取り出した。そして問題集を開く。予習でもしよう。

「ねえ、兄さん。聞いてよー」

そんな僕の頭上で急に声がして、シャーペンを落としてしまう。頭上……天井。僕は上を見た。女が浮いている。なんだか微妙に透けて天井が見えている。

「さつき野良犬に吠えられたのよ。あーもう最悪。あいつら美由が見えてるみたい。噛まれる心配とかないんだけどさあ、精神的に辛いつていうかー、びっくりつていうかー」

僕はシャーペンを拾ってから、数学の教科書とノートを開いた。さあ、三角比の勉強だ。sin、cos、tan。サインコサインタンジェント。そうブツブツと呟きながら頭に叩き込む。直角二等辺三角形は……四十五度で……えっと、いくつだっけ？

「ねえちよつと、聞いてる？ えーつと、あら、兄さんは高宮つていう名前なのね。ねえ高宮ちゃん、聞こえてんでしょ？」

二分の一だっけ？ そうノートに書いてみる。

「違うわよ。分母は√の二よ。高宮ちゃんバカね」バカな僕は分母に無理矢理、√を書き足した。「聞こえてんじゃんよ！」ああ、聞こえない。僕には何も聞こえない。

「耳がピクピクしてんじゃん」

そして僕の視界を妨害する半透明な女。中途半端に透けてる。茶髪のショート。ひらひらな上着にミニスカート。そんな幻覚のせいで、もやがかかったみたいで黒板が見えない。そしてそいつは浮いてる、地上から五十センチくらい。空中で正座してる。

「見えてるわよねえ？」

見えてない。僕には何も見えてない。

「……いいわよ。無視するんだつたら取り憑いてやるんだからねっ」

もやもやが僕の身体に覆いかぶさってくる。途端にゾクリとする背筋……寒い。でも我慢出来ない程じゃない。まだ四月は肌寒いのだ。寒いなんて当然なのだ。

そんなこんなで授業が始まる。隣の席ではロボ女がカチャカチャと得体の知れない機械的なものをいじっていて、目の前には半透明な女がふわふわ浮いてる幻覚が見えていて、運動

場ではメガネ委員長が「拙者がいるからには誰にも手は出させませんぞ！」大声で叫びながら腕を振り回していた。高校に入学してまだ三日なのに、僕の周りは変人だらけだ。こんな変人共がどうして僕にまわりついてくるのか、正直わからないがわかりたくもないので、僕は何も考えず、クールに過ごしている。ああ、肌寒い。そして周りの視線が冷たくてさらに寒い。皆、僕と目を合わせようとしてくれない。僕は変人共と同じ種に属していると見られてるのか、周りから距離をとられているようで、入学三日目なのに普通の友達ができている。……ああ、この何とも言えない気持ちはどう表現したらいいのか。クールを気取ってはいるが、たまには温かい友情が欲しい。

放課後も絡んでくる変人たちをスルーしながら帰宅すると、両親がものごっついコスプレをしていた。二人とも黒ローブを羽織っている。僕は目をそらす。親って何だろう。

「豪。お父さんたちな、魔族の手から世界の平和を守ってくるからな」

「豪。お母さんたちにしか出来ないことなの。わかってちょうだいね。一カ月くらいで帰るから。この封筒の中に二十万入ってるから。これで生活しておいてね」

封筒を受け取り、僕は居間に駆け込んだ。やった。これで毎晩遊び放題だ！

「お兄ちゃん、おかえりー」

緑髪の少女が居間でテレビを見ていた。タートルネックの上着。ミニスカートにニーソックスな少女。僕はスルーしてソファに座る。だってこんな子知らないし。僕妹なんていないもの。誰だよこの娘。少女と目が合う。笑いかけられた。

「お兄ちゃん、私ちよっと渴きそうー。お水ちよーだい」

「あんた誰？」

「……ひどい。私のこと覚えててくれないのね。私、リリーだよ」

「りりる？」

「何その旧仮名遣い……私がわからないの？　いつもお兄ちゃんにお水もらってたのに」

指差す方には母の大事にしてた観葉植物があるはずなのだけど、なくなっていた。植物だけ綺麗になくなっていった。土の中心部がぼっかりと凹んでいる。ああ、そういや母さんはあの観葉植物にリリーって名前をつけてたっけ。僕は毎日水やりしてたっけ。

「私、人間になつたみたいなの」

てことはこの子は植物ということになるが……確かに髪の色が緑ってのは変だと思ったんだよ。なるほど、これは葉緑素か。光合成出来るのか？　もうそこらへんもよくわかんなくなってきたのでスルー。ああ、現実逃避って素晴らしい。全部スルースルー。僕が逃避したいことは全部スルー！　玄関から「豪ー！　リリーと仲良くね！」と母親が叫んだので、まあ、色んなことをスルーして、リリーと仲良くしようと思う。

そして夕飯。僕はリリーとかいう娘と一緒にみそ汁をすする。だけどリリーは顔をしかめた。植物だから味が濃いものは好まないのだろうかとか考える。で、結局リリーは水にひとさじの化学肥料を入れて飲んだ。それで満足してた。僕も満腹になって眠たくなったのでどうでもよくなって、仲良く寝転んでテレビを見ることにした。クイズ番組がやっていた。芸人とアイドルが珍解答してるのを見るのはやけに腹立たしい。

「ねえお兄ちゃん。トリカブトの毒って何て言うの？」

「ブス」

「ひどい……」リリーがべそをかく。

「いや違うから。お前のことじゃないから。毒の名前だから」

「へえ。ブスっていうのかあ。じゃあ私の頭の毒はキュートって名づけるね」



何を言っているのか理解できない僕はリリーの頭を見る。うん、髪の毛。緑色だけど、ところどころ色が赤だったり青だったり茶色だったり。……うーん、これ、髪か？ どうなんだろう。植物だから葉っぱなのか？

「色んな種類の効能があるんだよ。たとえばこれ……痛っ」  
赤っぽい緑色の髪を一本、リリーは引き抜いた。

「睡眠薬はこれね。こっちの淡い黄色がキュート。他にも色々あるよ」

怖っ。こいつは歩く毒薬だ。恐ろしい。こいつは台所に立たせないようにしよう。ていうか常に帽子を被<sup>かぶ</sup>っててもらおう。僕は自室から持ってきた帽子をリリーに被せてやる。肉食獣型のももこ帽子。少し薄汚れている。ちよつとダサイ気もするが、リリーは気に入ってくれたようで、髪の毛は帽子の中におさまる。よし。

「それ、家にいる間は被<sup>かぶ</sup>っとけよ」

「わはー、やったやった、プレゼントもらっちゃった！ ありがとうお兄ちゃん！」

そんなに喜んでもらえるとは思ってなかった僕は、転がっていた使い古しをあげたことになんだか罪悪感。

「じゃあ私、庭で寝るから。おやすみー」

そして庭に出て行くリリー。気になって覗いてみると、いつの間にか、庭には深い深い穴が掘られていた。目算で一メートルくらいある。リリーはそこに飛び込んで、すやすや寝息を立て始めた。僕はすべてを忘れるようにベッドに潜り込んで眠った。色々な出来事が全部夢でしたオチを祈って眠った。だけど朝には現実がおはようございます。

んで、翌日の登校時間。

「待たれよ」

## ご購入はこちらから

---

こちらは、試し読みです。続きは、こちらで購入できます。

### ■講談社BOX編集部が手がける電子雑誌「BOX-AiR」創刊！

「BOX-AiR」は、西尾維新氏の「化物語」シリーズなどで知られる講談社BOXと、各界の著名なクリエイターが個人として集まり作り上げられた電子書籍「AiR」、そして「新世紀エヴァンゲリオン」など多数のヒット作を手がけるスターチャイルドが、新しい才能発掘を目指して創刊した電子雑誌です。

### ＜アニメ化作品を発掘！！「BOX-AiR」の特徴＞

新しい才能の発掘と育成を目的としている点は従来の文芸雑誌と変わりありませんが、最大の特徴は掲載原稿の募集を公式サイトで行い、ひと月単位で選考を行った上で、掲載される点。

また、毎号スターチャイルド制作グループを交えて掲載作品のアニメーション化が検討され、連載が単行本1冊分掲載された作品については、講談社BOXから紙の書籍として単行本化されます。

**BOX-AiR**零号/講談社BOX-AiR

価格：350円

パプー版（パソコン・PDF・ePub）：<http://p.booklog.jp/book/18527>

iPhone・iPadアプリ版：<http://itunes.apple.com/jp/app/id415281243?mt=8>